

2 今後の指導に向けて

【小学校国語】

- (1) **漢字の読み書き** …漢字に関しては、これまでも取り組みの必要性が指摘されている。平成25、26年度において、「読み」「書き」共に課題があったが、本年度は「読み」については設問3問ともに良好である。しかし、「書き」については設問3問ともに課題がある。漢字を「使っているかどうか」が大きな要素となっている状況も同様である。

授業時間内外での漢字の学習指導は実施されており、その評価評定もすべての学年において行われている。学習指導要領では、第1学年80字、第2学年160字、第3学年200字、第4学年200字、第5学年185字、第6学年181字である。また、同様に学習指導要領では、「当該学年の前の学年までに配当されている漢字を書き、文や文章の中で使うとともに、当該学年に配当されている漢字を漸次書き、文や文章の中で使うこと。」とされている。「浴びる」「巢」は第4学年、「病院」は第3学年に配当されている。これらの漢字について6年生4月の時点で習得が不十分、つまり定着において課題があるのはこれまで通りである。

①漢字を読んだり書いたりする機会を意図的・計画的に設定する。

これまでも指摘されている通り、定着へは反復練習も不可欠である。教えて練習して確認して終わるのではなく、朝学習の時間帯や国語の授業内、さらには家庭と協力して宿題や家庭学習課題として、これまでに習得した漢字を書く時間を意図的・計画的に設定する必要がある。

また、日常的に文や文章の中で適切に使うことができるようにすることも重要である。各教科の授業内外でのノート指導やふりかえり活動での作文指導など、習得した漢字を読んだり書いたりする機会を設定し、児童が漢字を身近なものとして捉えることができるようにする必要がある。

②国語辞典や漢字辞典の利用を習慣づける。

漢字を習得し語彙を広げるためには、国語辞典や漢字辞典を日常的に利用して調べる習慣を付けることが重要である。パソコン等の普及により求めている漢字が容易に出てくる時代となっているが、辞書や辞典を使って新出漢字等の読みや意味や筆順を調べる活動を取り入れたり、各教科の調べる学習の中でも積極的に利用する機会を設けたりする必要がある。

- (2) **言語活動の充実** …文部科学省が指摘しているように、読解力や記述式問題に課題があり、思考力・判断力・表現力の一層の育成が必要である。そのために、これまでに「伝え合う力」として町内小学校でも研究を重ねてきたように、言語活動の充実を図ることが大切である。言語は知的活動(論理や思考)の基盤であるとともに、コミュニケーションや感性・情緒の基盤であり、豊かな心を育む上でも、言語に関する能力を高めることが重要である。

①「読解力」を意識した、読み取り→考える場を設定する。

PISA調査における「読解力」の定義は、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考

する能力」とある。書かれている情報を的確に読み取ること、すなわち目的に応じて中心となる語や文章を捉えたり要旨を捉えたりする学習の場を意図的に設定し、それをもとに自分の考えを創っていく流れのある学習が必要である。また、国語科において「読解力・読み取る」ことについて、町内で今後研究に取り組もうとしている小学校の研究成果を共有化していく必要がある。

② 読み取り→考えたことを、目的や意図に応じて必要な内容を書く場を設定する。

課題を解決するために、読み取り→考えたことを文章に書いたり、スピーチの構成や表現を工夫したりし、目的に応じて必要な内容を適切に書く、流れのある学習が必要である。その際には、理由や根拠をもとに説明したり、構成や表現の工夫をしたりしながら、相手に伝わる文章を実際に表現する場面を大切にしていかなければならないのはこれまで通りである。

③ 読み取り→考える→書いたことをもとに、話したり討論したり、感じたことや考えたことを交流する場を設定する。

読み取ったことをもとに、考えたり書いたりし、そこから友達に向けて発信し、交流する流れのある学習が必要である。これまでも指摘されている通り、その際には、司会の役割を果たしたり、参加者として立場や根拠を明確にして話し合いを進めたりしながら、課題や問題を解決していく実践的な学習が必要である。

【小学校算数】

(1) **四則計算** …四則計算に関しては概ね良好であるが、一部、分数の減法除法に課題が見られた。引き続き、一年生から着実な定着を重ねていきたい。

① 習得に向けての状況把握、補習や補充による確実な習得を図る。

整数・小数・分数の四則計算については基盤となる重要な内容であるため、児童個々の理解や習得の状況を把握し、必要に応じて補習や補充を実施して確実な習得を図る必要がある。操作を覚えるのではなく、既習の知識や計算などを基に計算の仕方を考え、その意味を確実に理解できるようにする必要がある。

② 計算する機会を意図的・計画的に設定する。

国語の漢字同様、定着へは反復練習も必要である。学習する学年以降も適宜練習の機会を設けて継続的に指導する必要がある。定着に向けた授業や、朝学習の時間等を使った取り組み、そして家庭と協力して宿題や家庭学習課題として、日常的・継続的に練習していける場を、意図的・計画的に設定する必要がある。

(2) **課題として挙げられている領域・単元への取り組み** …本年度は出題されていない内容も含め、これまでに課題とされてきた「割合や単位量当たりの大きさ」「四捨五入・およその数」「図形の性質と面積」「二つの数量を□、△などの記号を用いて式に表す」については、年度によって、また学校によって正答率に差があるため、今後も重点的に指導を行う必要がある。

① 「割合や単位量当たりの大きさ」については、5年生時での確実な理解を図る。

比較量＝基準量×割合の関係や、どちらを単位量とするかなど、児童が理解しにくい内容が指摘されているため、指導の工夫とともに、少人数や個別に対応していく必要がある。また、日常生活の事象の解決に単位量当たりの大きさを活用して、合理的な判断と能率的な処理ができることを実感できる指導を行う必要がある。

②日常生活の事象と関連づけて、「四捨五入」「切り上げ」「切り捨て」のそれぞれの意味と処理の仕方について確実な定着を図る。

形式的な処理に終わらせることなく、日常生活での経験や興味・関心と関連づけて、概算の用語や処理の仕方を取り扱うことが重要である。

③図形の性質については観察や構成などの活動を通して理解を深める。

図形については、性質について答えたり面積を求めたりするだけでなく、その基本的な知識を使って解決したり、その経過を説明することが求められている。各学年において作図も含めて具体的な操作と伴った学習展開が重要である。

(3) **言語活動の充実** …B問題を中心に、数学的な考えを問われる問題や記述式の問題への課題が挙げられる。国語科同様に、読み取り→考える→書く→交流するという流れのある学習を展開し、子どもの思考力・判断力・表現力等を育むための言語活動の充実を図る必要がある。

①解釈したことや分析したことを自分の言葉で説明させたり、論述させたりする学習活動を意図的・計画的に設定する。

平成26年度寒川町教育研究員研究会教育課題研究部会が平成27年2月の研究発表において、算数・数学科における思考力を育てる指導の工夫を考えると、最も必要なこととして提言したものである。

算数においては、情報を読み取ったり数値を取り出したりし、条件を把握したり解決への見通しをもったりして、筋道を立てて考えることが要求されている。問題解決へ向けて、数学的な便利さや簡潔さを理解しつつ、自ら考え、判断し、実行できる力を育む学習が必要とされている。

②思考力・判断力・表現力等を育むための学習活動を重視する。

文部科学省が重要としている、各教科等における学習活動を重視する。

- ・体験から感じ取ったことを表現する
- ・事実を正確に理解し伝達する
- ・概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする
- ・情報を分析し・評価し、論述する
- ・課題について、構想を立てて実践し、評価・改善する
- ・互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる

これは、国語における流れのある学習と同様である。児童一人ひとりが、自分の課題・問題について、最も合理的な処理の仕方を選択し、自分の考えを表現し、伝え合い、交流した結果を自分に戻して再考するというサイクルを積極的に取り入れていく学習が必要とされている。

【小学校理科】

(1) **A「主として知識」について** …Aの問題については全国平均と同様の正答率である。しかし、設問によっては学校間の開きが見られる。器具の名称や適切な扱い方の理解、星座や星の動きの観察など、具体的な操作を行い、実感を伴った知識習得が必要である。

- (2) **言語活動の充実** …「水があたたまる順番」の設問では、4人の子どもの予想を読み、誤った予想をしている児童の考えだどどのような実験結果になるか、さらには実験結果のデータから、正しい結果の考察を行っているのは誰かという設問に課題があった。また、水の温度と砂糖が溶ける量のグラフを基に考察し、析出する砂糖の量を導きだしその理由を記述する設問に課題があった。

問題や課題を理解し、予想を立てて実験の方法を考え、実際に実験を行いその結果を考察するという一連の流れを確立する中で、他者との意見交流の場面を重視したり、根拠や理由を結果のデータを基に説明したり書いたりする場面を意図的・計画的に設定する必要がある。

【中学校国語】

- (1) **語句の意味を理解し、文脈の中で適切に使う** …A問題は2年連続で全国平均と同様の傾向にある。漢字に関して、これまで取り組みの必要性が指摘されてきたが、本年度は全国平均を上回る設問もあり、漢字については良好である。一方、「語句の使用」については、「討論の口火」と「たなびく雲の間から」(選択式)に課題がある。小学校同様、語彙の獲得については、普段から「使っているかどうか」が大きな要素となってくる。家庭学習も含めた日常的・継続的な取り組みを意図的・計画的に設定する必要がある。さらに、国語辞典や漢字辞典を積極的に活用して、自ら学び、豊かな言語を獲得できる指導の工夫が必要である。

- (2) **言語活動の充実** …B問題ではほぼ全国平均と同様の傾向にあり、大きな課題は見受けられない。その中で、「ウェブページの文章」「日本人の人口推移を表したグラフ」「雑誌の記事の一部」を読み、「2020年の日本はどのような社会になっていると予想しますか、また、その社会にどのように関わっていきたいと思いますか。条件1と条件2に従って書きなさい。」という設問に若干の難しさがあったようだ。

小学校同様、読み取り→考える→書いたことをもとに、話したり討論したり、感じたことや考えたことを交流する流れのある学習の場の設定が必要である。「生徒質問紙」にも表れているように、中学校では、長期にわたる取り組みの成果が出ている。今後も、書くことについては、自分の考えや意見を明らかにし、考えの根拠となる事実を明確に示したり具体例を加えたりすることを意識させる必要がある。また、書いたことをもとにして、相手に効果的に伝わるように工夫し、実際に交流する学習場面を意図的・計画的に設定することを、引き続き行う必要がある。

【中学校数学】

- (1) **「数と式」領域** …A問題は2年連続で全国平均と同様の傾向にあり、大きな課題は見受けられない。一部、「数と式」領域で「 $2x - y = 5$ を y について解く」など数問で学校間の差が大きい設問がある。単に数式を処理するのではなく「意味理解」の力を問う設問が多い。各学校において課題を抽出し、授業改善へつなげるとともに、十分理解できていない生徒への補充学習等、着実な伸長を図りたい。

- (2) **言語活動の充実** …B問題は2年連続で全国平均と同様の傾向にあり、大きな課題

は見受けられない。「連続する3つの整数の和は中央の整数の3倍になる」ことを n を使って説明する設問と、さらに「連続する5つの整数の和」について説明する設問については前問と連続した記述式で、やや不得意さが出ている。しかし、「数学的表現で説明する」「図形の性質を用いて説明する」「条件を変えた場合について証明する」といった他の記述式の設問は概ね良好である。記述式問題に対する課題として、「予想した事柄を数学的な表現を用いて説明すること（事実・事柄の説明）」「問題解決の方法を数学的な表現を用いて説明すること（方法の説明）」「事柄が成り立つ理由を説明すること（理由の説明）」の3つを挙げていたが、指導の成果が正答率の数値として表れている。実生活における事象を数学的な解釈に基づいて考察できるように指導することが大切であり、生徒自らが事柄を予想することができるように指導することや、帰納したり類推したりして予想を立て、その予想を明確に表現できるように、引き続き指導することが大切である。

【中学校理科】

- (1) **A「主として知識」について** …理科は全国平均と同様の傾向にあり概ね良好である。Aの問題については「塩化ナトリウムの化学式を選ぶ」設問に課題があった。基本的な知識・理解について、確実な知識習得が必要である。
- (2) **言語活動の充実** …「実験結果から音の高さの変化の根拠を波形をもとに選ぶ」では、コップに水を注いでいると聞こえる音が次第に高くなることを扱っている。日常生活において理科で学習した知識や概念を活用できるようにすることは、科学的な思考力と表現力を高める上で大切にしていきたい。

また、変化について説明したり、理由を説明したり、適切な方法を説明したりする記述式の問題が理科のB問題でも多く出題されている。暗記することにより知識を得るだけではなく、中学校理科においても、問題や課題を理解し、予想を立てて実験の方法を考え、実際に実験を行いその結果を考察するという一連の流れを大切にしていきたい。その中で、自分でやり方や方法、理論や考察をじっくりと考え、根拠や理由を明らかにしながら説明したり書いたりする場面を意図的・計画的に設定する必要がある。

【全体として】

中学校3年生においては、全国学力・学習状況調査が再度悉皆調査となった平成25年度から3年間に渡り、課題として挙げられていた各項目への改善が見受けられ、全体としては全国平均レベルまで引き上げることができている。

これは、中学校における各教科の授業力向上および生徒一人ひとりへの個別の対応等、地道な取り組みの成果であると考えられる。質問紙の結果からも、「目標（めあて・ねらい）」をしっかりと提示し、生徒間で話し合い活動を活発に行いながら「創りあげる」学習活動の充実が見られている。

また、前出のとおり、現在の中学校3年生が小学校に入学した平成19年度が、寒川小学校の校内研究が「伝え合う力の育成」をテーマに掲げ、言語活動の充実に取り組み始めて2年目の時期にあたる。その後、この学年が小学校を卒業するまでに、町内小学

校では、「伝え合う」をキーワードに4校、算数を中心に「すじみちを立てて考える力」に1校と、すべての学校において言語活動の充実に取り組み中学校に接続している。一方、中学校では、道徳を中心に教科内外において、「確かな学力」「学び合い・高め合い」「言語活動」をキーワードに取り組みを進めている。その9年間にわたる一貫した指導が、着実に成果に結びついていると言える。

しかし、小学校6年生では、全体的に全国平均との差が広がり、知識・活用の両面において課題が発生した。その差は国語において顕著になった。年度ごとの子どもの様子や、波といったものも考えられるが、全般的に学力向上への具体的な方策を取る必要がある。

次年度中学校で子ども達を受け入れる中学校も含めて、子どもへのより良き指導について、学校・家庭が一体となって取り組む必要がある。学校ごとの分析・取り組みと、教育委員会としての分析・取り組みが、具体的なものとして有機的なつながりが要求されている。

(1) 寒川町教育振興基本計画の学校教育の具現化を図る

寒川町では、知育・徳育・体育の3つの側面から、調和のとれた人間づくりをめざしている。全国学力・学習状況調査の結果はその一部であり、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立するための資料とするものである。「テストや調査のために授業をしているのではない」のはもちろんのことであるが、児童生徒の学習を充実させ、定着を図り、学力向上が人間形成においてプラスとなるように、授業を構成していかなければならないという考えはこれまで通りである。

(2) 真正な「学び」の繰り返し

しかしながら、今年度の調査の結果は、中学校3年生では成果が上がり、小学校6年生ではこの3年間で全国平均との差が最も大きくなってしまった。これから学力向上へ向けて学校や家庭と共に取り組んでいくにあたり、「学び」の捉えがねじ曲がらないように気をつけていきたい。

現在の教育現場において、「決められた物事をバケツの中に注ぎ込むイメージ」や「線路の上をゴール目指してひた走るイメージ」「悪いところをカルテを作って診断し治療するイメージ」等、「知識注入型」や「言っておしまい」「教えたはず」といった授業観・教育観・枠組みからはすでに離脱しているのはこれまでに記述したとおりである。

「知識基盤社会」である21世紀を生きる児童生徒にとって、「生きる力」の具現化が重要になっている。これから必要となってくることは、自分で考え、意志決定をすること、つまり、一人ひとりが自分の意見を言い、皆で合意し納得しながら社会を運営していくことである。よって、「自分の意見をはっきり述べる」ことができる子どもを学校で育てることは、よりよい未来を創るために必要なことであろう。具体的には、「自分で考える」→「表明する交流する」→「合意形成や問題解決を図る」→「自分の考えや視座を決め直す」といった、子どもが考えることを中心に据えた、流れのある真正な「学び」を繰り返していくことが、「読み取り捉える」ことにつながり、「理由や根拠を挙げながら筋道立てて」、「話す・書く・説明する」につながり、ひいては学力向上につながっていくと考える。

今回の小学校の結果から、これまでの考え方を覆し、学ぶことの意味や価値を知らされずに機械的な暗記を強いられるような、児童生徒にとって無意味な学習が主流になることがないようにしたい。学習する内容について意味を持たせる有意義な学習を重視し続けていきたいと考える。

(3) しっかり教え、しっかり考えさせ、授業をデザインする

中学校の成果と小学校の課題と、有意義な学習の展開を考えたとき、そこには、「教えるべきことを丁寧に教える」「教えたことをもとにじっくりと考えさせそれを交流する」という簡潔な授業がイメージできる。

もちろん、学習規律がしっかりしている授業では、児童生徒が落ち着いて学習に取り組めるのは言うまでもない。学校においては、学習規律は、学校生活全体の規律と密接に関わっており、授業力向上は児童生徒の学力向上のみならず、児童生徒の生活そのものを変えていくことにつながっていく。しかし、学習規律でさえも、無理矢理に我慢させられるものではなく、学び合う場を共有する一種の文化を創るという意味を持っているはずである。

しっかり教え、しっかり考えさせることは、授業展開において、始まりと終わり、めあてや課題の提示とまとめや振り返り活動、起承転結といった構成を重視し、知識を獲得した児童生徒が意見や考えをもち、それを交流し教師と共に授業を構築する、いわば「授業をデザインする」意識にたった実践が求められる。

(4) 勉強が好きになる授業を創る

各教科に対して、勉強が好きになる授業の構成ができているかどうか、教師側の意識と省察も重要である。何を教え・何を考えさせるのか、授業をデザインする上でのイメージが重要となる。週案や指導案レベルも含めて、目的的に授業が行えるようにする必要がある。

また、本年度においても、小・中学校共に、正答率や質問紙の回答に学校間の差が大きい設問・項目がある。さらに、学校内でも3年間で数値の変動の大きな項目も見いだすことができる。学校の傾向は、児童生徒・家庭・教師・環境等の総体としての傾向である。調査に該当している学年の特性や集団としての色合いが大きく影響していることも事実であろう。町内小中学校で共通して取り組めること、学校独自に取り組めることを精査し、教職員間の合意のもと、具体的な動きをつくっていく必要がある。

(5) 校内研究と一体化した授業改善の取り組み、全町的な研究の交流

前述のように、小学校において「伝え合う力」に重点をおいて研究してきたことと中学校の言語活動への接続の成功は認められる。校内研究において児童生徒も含めた全校で取り組むことと学力向上は密接に関係している。

しかし、本年度、半数近くの学校が研究テーマを変えたり、研究教科やサブテーマや講師を変えたりして、新たな方向性へと校内研究の舵を切っている。言語活動の充実において、コミュニケーション能力に特化してきた観のある研究からの転換期にあることは今回の小学校の結果に密接に関係しているように思える。

本年度は、かながわ学びづくり推進地域研究委託事業を受け、「さむかわ学びっ子育成事業」を開始している。各校が著名な講師に直接指導を受け、そこに他校の教師が参

加していく風通しのよい研究の交流が図られている。今後の深化発展が期待される。

(6) 語彙の獲得と使用に関する具体的な取り組み

町内小中学校共通の課題である。前述のように、定着に向けた授業の展開や、教材の工夫、細やかな指導等、検討する必要がある。通常の授業中のみならず、朝自習の時間を使ったり、宿題を出して家庭と協力して学習習慣の確立を図ったり、日常的・継続的に取り組んでいく必要がある。また、実際に本を読む機会を増やしていったり、漢字を使いながら文章を書く機会を積極的に増やしていき、普段から漢字や言葉や文章にふれあい、漢字の読み書きに取り組ませていきたい。

本年度の調査結果により、特に小学校における漢字の定着に大きな課題があるため、小学校高学年を対象とした、具体的な取り組みについて検討する必要がある。

(7) 数と計算に対する取り組み

中学校における「数と式」は概ね良好であるが、小学校の「数と計算」における四則計算を中心に、今後も各習得学年においての着実な定着を重ねていきたい。前述のように日常的・継続的な取り組みが必要であるため、丁寧な指導を行うと共に、少人数による指導、個別指導、補充学習等を行い、確実に定着を図る必要がある。

(8) 宿題や課題等、家庭学習へのアプローチの検討

日常的な宿題や課題の提示については、成果と効果が認められてきているが、家庭での学習時間が不足している。「宿題はまじめにやる」子ども達である。家庭での学習を習慣化・定着化させるために、授業の内容と家庭学習の宿題や課題のつながり、学校全体としての予習・復習、課題の設定等、担任や教科に任せるのではなく、組織的な検討が必要である。また、本年度導入したeライブラリの積極的な活用も推進していく必要がある。